



2022-1号
令和4年2月

発行所 独立行政法人国立病院機構 西別府病院
住 所 〒874-0840 大分県別府市大字鶴見4548番地
TEL 0977-24-1221(代表)
FAX 0977-26-1163(代表) 0977-76-7231(連携室)
ホームページアドレス [http\(s\)://nishibeppu.hosp.go.jp](http(s)://nishibeppu.hosp.go.jp)

謹賀新年



西別府病院から望む朝日（撮影者：内科 城内英郎）

目 次

新年のご挨拶	2	第46回日本重症心身障害学会学術集会を開催して	5
院 長	2	神奈川病院への看護支援の報告	8
副院長	3	スタッフに囲まれたコロナ禍のあたたかい成人式	9
事務部長	4	福祉サービスは三本の矢	10
看護部長	4		

理 念

私たちは、常に研鑽し、患者さまのために最良の医療を提供します

基本方針

1. 患者中心の医療 2. 患者の権利と尊厳を守る 3. 政策医療の推進 4. 地域医療への貢献
5. 最良・安全医療の提供 6. チーム医療の推進 7. 経営基盤の確立

患者さまの権利

1. 良質で安全な医療を公平に受ける権利 2. 十分な説明を受け、質問する権利
3. 自分で医療の内容を決定する権利 4. プライバシーを保護される権利
5. カルテ開示を受ける権利 6. セカンドオピニオンを受ける権利 7. 臨床研究への参加と拒否の権利



日本医療機能評価機構
認定番号: JCI1505号

新年のご挨拶



院長
後藤 一也

謹んで新春をお祝い申し上げます。

皆様におかれましては輝かしい新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

旧年中は格別のご厚誼を賜り、誠に有難うございました。

西別府病院は令和4年4月から、増築した東病棟に病棟を集約・再編して、セーフティーネット系医療により特化した医療サービスを提供して参ります。再編準備の中で、特に病棟がユニット化する結核病床の運用について、大分県や関係医療機関との協議や調整が進められてきました。課題は多く、その解決にあたり、当院に大きな変革を求められる点多々ありますが、これからの10年、20年後の当院の医療サービスのあり方を見据え、取り組む好機と捉えています。

私自身の課題解決に向けての心構えとして、令和3年度10月号広報誌に記した「始めあらざるなし、克く終りある鮮し」（詩経）と、令和4年仕事始め式で「大事は小事より起こる」の2点です。

以上の心構えを職員と共有することに努めて、職員一丸となって課題解決に向けて取り組んで参る所存です。

令和4年が皆様にとって、より良い1年となることを心よりお祈りするとともに、これからも当院へのご支援、ご指導を引き続き賜りますことをお願い申し上げます。私の新年のご挨拶とします。

令和4年 元旦



今年の初日の出は西別府病院から拝みました。別府湾、高崎山背後の暁、曙、東雲、日の出の移ろいをみて神々しさを感じました。

年頭挨拶

—新型コロナ対応を振り返って—



副院長
原 政 英

新年を迎えるにあたり謹んで年頭のご挨拶を申し上げます。自身の旧年を振り返ると、新型コロナウイルス感染症対策に注力した一年であったように思います。とりわけ感染拡大（第3波～第5波）に応じて展開されたワクチン接種事業はかつてない経験でした。労を惜しまずワクチン接種や感染防御に取り組んでいた院内のスタッフの皆様から心から感謝申し上げます。

年初にピークを迎えた第3波をうけて、医療従事者へのmRNAワクチンの接種が開始されました。これまでに使用経験のないワクチン製剤であることから、先発病院への見学に始まり、会場の設営・副反应对策・手順書作成・接種スタッフの確保など2回の接種に向けた準備に追われました。

その後の第4波（3月～6月）では変異株（アルファ株）の出現があり、高齢者および高リスク者を対象に外来ワクチン接種が進められました。ここでも接種会場の設定、その後の副反応への対応等の準備が必要でした。東京五輪直前の7月に始まった第5波はデルタ変異株が主流となりました。当院ではこの第5波の終

わりまでに職員・外来者および入院患者を対象に延べ2,070回のワクチン接種を実施してきました。

昨年12月からは第6波に備えたブースター接種が開始されました。この時期からウイルスはオミクロン株に形を変え感染力を強めています。経口薬（モヌルピラビル）が治療薬に加わりましたが、ワクチンや治療薬のみに頼ることなく、基本となる日常感染対策（手洗い・マスク着用・感染機会減少等）を見直し、一日も早く新型コロナ収束を迎えることを願ってやみません。



新年のご挨拶



事務部長
清水 就人

新年あけましておめでとうございます。

令和3年度も残すところ、あと3か月となりました。昨年7月に着工した東病棟増改築整備工事は、今年3月の完成に向けて予定どおり進んでいます。完成後は、既設の東病棟の1階に12床、2階に5床、3階に5床を増床し、増床部分はそれぞれ、各階の病棟とユニット化する計画です。1階の増床部分は、結核病床として運用しますが、結核病床数は、現在の50床から12床体制となります。なお、結核病床数については、令和4年度は、暫定措置で12床運用としますが、令和5年度より、当初計画の10床運用となります。結核病床数は縮小しますが、当院の大分県の結核医療拠点病院としての役割は、なんら変わることはありません。しかし、病床数の縮小に伴い、今まで以上に厳格な病床管理が必要になります。もちろん、大分県の結核医療は、当院だけが担っているものではありません。今後は、大分県をはじめ、県内の感染症指定医療機関等と連携しながら、

大分県の結核医療体制を維持していくこととなります。経営面におきましては、12月までの累計経常収支は、黒字を計上しています。今後は、令和4年度の病棟再編に向けて、中2病棟、中4病棟の患者様の退院や転院を進めていく必要があります。患者数の減少は、避けることはできません。そのため、中病棟の患者減の影響を最小限に留めて、令和3年度が黒字で終わることができるよう、東病棟においては、空床を減らす効率的な病床運用に、ご尽力をお願い致します。

新型コロナウイルス感染症については、令和3年度中は、要請があれば、当院もCOVID-19患者の受入れを行うことになっています。また、重度心身障害児(者)の濃厚接触者の受入れについては、新年度以降も継続して担うことを県から求められています。従いまして、受入れ要請があった場合には、職員の皆さまにご協力をお願いすることになりますが、その際は、何卒よろしくお願い致します。皆様の日ごろの感染管理の徹底が功を奏し、幸い当院職員からCOVID-19罹患者は出ておりませんが、年末年始を終えて、第6波も危惧されるところです。まだまだ、収束の見通しがたかない状況ですが、皆さまにおかれましては、ご家族も含めまして、さらなる感染対策の徹底に努めて頂き、健康にご留意頂きますようお願いいたします。

本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

新年のご挨拶



看護部長
中尾 とよみ

新年明けましておめでとうございます。

2021年を振り返ってみますと、神奈川病院への看護師の派遣、療育支援棟での濃厚接触者の受け入れや、ホテル宿泊療養施設やワクチン接種への派遣等、皆様に多くのご協力をいただきました。あらためて感謝申し上げます。また、昨年は後藤院長を会長とする第46回日本重症心身障害学会学術集会在開催され、当院からも多数の発表が行われました。看護部門では、「重症心身障害看護のやりがいを考える」のテーマでシンポジウムが行われ、当院の師長もシンポジストとして参加し、あらためて日常の生活を支える看護ケアを通して、看護師のやりがいを見いだしていくことの

重要性を再認識しました。

また、東病棟の増築工事も始まり、工事に伴う患者移動や、神経・筋難病病棟と結核病棟のユニット化に向けて、検討を重ねてまいりました。今年3月末には工事が完成し、中2病棟の閉鎖、中4病棟の縮小とともに、増築部分への移転となります。2022年は西別府病院にとって大きな節目となる年です。

今後、さらにセーフティネット系医療に特化した役割と結核拠点病院としての役割を果たしていかなければなりません。看護部としても、看護部の理念に謳われています「人間の生命と尊厳を尊重し、安心と信頼に応える」看護の提供ができるよう取り組んでまいります。

2022年の寅年は、新しい芽が「成長する」、新しい日常が「始まる」年だそうです。西別府病院の病棟再編とともに、西別府病院が成長していける1年になりますよう、職員一同、力をあわせていきましょう。本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

第46回日本重症心身障害学会学術集会 を開催して

院長 後藤 一也

令和3年12月10日(金)11日(土)に第46回日本重症心身障害学会学術集会を西別府病院の主催で開催しました。「ウイズコロナ、ポストコロナ時代の重症心身障害医療と福祉」のテーマのもと、本学術集会としては初めてのオンライン開催となりました。当初、本学術集会は令和2年10月に現地集合(大分市ホルトホール)での開催予定でしたが、新型コロナウイルス感染症のため延期となりこの度の開催となりました。

大分では、三吉野産治名誉院長が会長を務められた第16回大会(平成2年)以来31年ぶりの開催となりました。この31年の間に、重症心身障害医療の内容やそれを取り巻く環境も大きく変化しましたが、重症心身障害医療に携わる医療者にとって、本学術集会が研修、意見交換、交流の中心の場であることに変わりありません。プログラム作成にあたり、学会員、参加者の方々に有意義な内容であることを目指したことはもちろんのこと、新型コロナウイルス感染症対策を含めて、当院が取り組むべき課題を念頭に置いたプログラムにしたいと考えておりました。

テーマに沿って、指定演題として、新型コロナウイルス感染症を環境史、感染症史からの解説、面会制限、ワクチンに関する講演をしてもらいました。ワークショップとして、国立病院機構と日本重症心身障害福祉協会(公法人立施設が参加)7施設の保育士からコロナ禍の日中活動について紹介してもらいましたが、日中活動に絞ったまとまった形で発表していただいたことは、施設間の情報交流という点からも前例にないことでした。

シンポジウム「重症心身障害看護の“やりがい”を考える」では、シンポジストとして原口麻友看護師長(東3病棟)が、「重症心身障害看護の専門性向上や人材育成のための看護師長としての取り組み」を発表しました。看護師は医療と日常生活援助、日中活動支援の懸け橋というべき存在です。看護の専門性をどう高め

ていくか、病院にとって大きな課題ですので、発表内容を発展させて、業務や研修につなげていただきたいと考えます。シンポジウムの準備のため、座長、シンポジストで何度か検討の場を設け、中尾看護部長も参加し、原口師長の発表を含めてシンポジウムの内容を詰めました。うち1回は私も参加しましたが、重症心身障害看護に熱心に取り組む外部の方々との意見交換で多くのことを学ばせていただきました。これも学術集会がなければ経験できなかったことでした。

教育講演では、重症心身障害施設の救急訓練、骨粗鬆症、在宅支援ネットワーク、終末期医療と意思決定支援など、当院が取り組むべき課題を取り上げて、講師の先生から解説して頂きました。とりわけ救急訓練は、今からでも取り組まなければならない課題です。

当院からの発表は、①川本郁江児指導員「当院のオンライン面会の実績と課題、今後の取り組み」、②岩槻篤則診療放射線技師「骨密度検査の必要性-骨密度検査を安定して行うためにできること-」、③西口里穂管理栄養士「当院における経管栄養患者の微量栄養素補給量の現状」、④赤峰伴子看護師(緩和ケア)「非がん患者の緩和ケア導入の取り組み-経過報告-」⑤古海一博薬剤部長「重症心身障害児(者)における下剤の使用状況」、⑥加藤恵美看護師(東3)「統一した口唇閉鎖介助の実践」、⑦久我真央佳看護師(東4病棟)「重症心身障害児(者)の個性に応じた呼吸フィジカルアセスメント」の7名の職員でした。どの発表も興味ある内容で、発表された本人とともに、支援、指導した関係職員の皆様に感謝申し上げます。

令和元年9月に岡山で開催された第45回学術集会には、運営視察などを目的に、中尾看護部長、板井師長、福田師長、療育指導室長、管理課長、専門職の皆さんと参加しました。懇親会では、第46回大会のPRのため、皆さんと一緒に壇上にあがりましたが、出席されていた黒川徹名誉院長も加わって頂き、会場も私たち

も大いに盛り上がったことが印象に残っています。あの頃はオンライン開催など思いもよらないことでした。現地集合での活発な質疑応答や会員交流など学術集会の雰囲気、臨場感などを体感することは叶いませんでした。その一方で、話をされる先生もその場で講演、そのお話をその場で視聴できるというオンラインの長所を生かして、お願いしたいと考えた先生に、日程、旅程の制限無しに講演を受諾していただけたことはICT活用という時代の流れを実感しました。

学術集会には会員601人、非会員340人あわせて941の方が参加されました。参加者数はこれまでの学術集会に比べると少なくなりましたが、会員に対し

て半数を超える非会員の方々が参加されたことが特筆すべきことでした。大きな支障なく無事学会を終了できたことを職員の皆さまに感謝申し上げます。とりわけ、学術集会の当院での視聴会場の設営、運営に関わった菊池管理課長はじめとする管理課や看護部の皆さんに感謝申し上げます。

3年越しの仕事に区切りをつけられました。職員の皆さまのご理解、ご支援への見返りの意味においても、学術集会開催が病院の医療の質の向上につながることを祈念して報告を結びます。

第46回日本重症心身障害学会学術集会

ウィズコロナ、ポストコロナ時代の
重症心身障害医療と福祉

開催方法	オンライン開催
会 期	2021年12月10日(金)・11日(土) -ライブ配信- 2021年12月10日(金)~2022年1月14日(金) -オンデマンド配信-
大会長	後藤 一也(国立病院機構 西別府病院 院長)
H P	https://www.procomu.jp/smid2021/

プログラム<指定演題>

参加費
会 員 4,000円
非会員 5,000円
※事前申込必要

<運営事務局・お問合せ>
株式会社プロコムインターナショナル
smid46@procom-i.jp

<特別講演>

1. 鈴木康之先生の足跡を辿って～東京小児療育病院スタッフとの歩みと超重症児スコアの考案～
福田雅文(みさかえの園総合発達医療センター)
2. コロナウイルスはどこから来てどこへ行くのか/石 弘之(評論家)

<基調講演>

- 新型コロナウイルス感染症における重症心身障害施設/児玉和夫(堺市立重症心身障害者(児)支援センター)
指定発言: 国立病院機構重症心身障害病棟のコロナ禍における面会の実態と今後の展望/鈴木由美(国立病院機構下志津病院)
家族の立場からコロナ禍における面会の制限/坂田和夫(全国重症心身障害児(者)を守る会)
ICTの活用:オンライン面会/三田勝己(星城大学)他

<シンポジウム>

1. 重症心身障害看護の“やりがい”を考える
重症心身障害看護の専門性向上や人材育成のための看護師長としての取り組み/原口麻友(国立病院機構西別府病院)
認定看護師の育成と成果/藤島信也(久山療育園重症児者医療療育センター)
2. 多様性の時代における重症心身障害児(者)への看護ケアの創造と共創/市原真穂(千葉科学大学)
2. 重症心身障害児(者)の新型コロナワクチン
新型コロナウイルスワクチンの免疫獲得機序と変異株への対応/菅 秀(国立病院機構三重病院)
重症児者における新型コロナウイルスワクチン接種後の安全性に関する調査研究 中間報告/遠藤宏宏(国立病院機構琉球病院)
重症心身障害児者の新型コロナウイルスワクチン免疫原性評価/抗体産性とT細胞応答(QFT)/木藤嘉彦(国立病院機構兵庫おおの病院)

<教育講演>

1. 重症心身障害施設における救急訓練/星出龍志(はまゆう療育園)
2. 重症心身障害児および障害者における骨折と骨粗鬆症について/酒井朋子(東京医科歯科大学附属病院)
2. 重症心身障害者における骨粗鬆症の特徴と治療/星野弘太郎(西部島根医療福祉センター)
3. 医療・福祉・行政が協働して取り組む在宅支援～兵庫県の現状を紹介し、ネットワーク構築の重要性を考える～/河崎洋子(にこにこハウス医療福祉センター)
4. これからの重症心身障害医療について考える/余谷暢之(国立成育医療研究センター)
5. 終末期医療と意思決定支援
1)緩和医療の実践～こどもホスピスの取り組み/鍋谷まこと(淀川キリスト教病院)
2)ACPとエンド・オブ・ライフ支援/船戸正久(大阪発達総合療育センター)

<ワークショップ>

- コロナ禍での日中活動支援の意義を考える～変わったこと、変わらないもの～
古賀聖子(国立病院機構熊本再春医療センター)、山田いずみ(久山療育園重症児者医療療育センター)
発表施設: 島田療育園、横浜医療福祉センター-港南、聖隷おおぞら療育センター、ひわこ学園
国立病院機構東埼玉病院、奈良医療センター、南九州病院

<看護研究応援セミナー>

- 研究の芽を育て、花を咲かせるために～
『障害を持つ児、家族における在宅支援ノード活用状況の実態調査』の計画・実施・投稿作業をした経験から～
方波見美幸(茨城県立医療大学附属病院)、市川陸(茨城県立医療大学)、藤岡寛(茨城県立医療大学)、涌水理恵(筑波大学)

<共催セミナー>

1. 育ちをかくむ医療機器とのつきあい方/奈須康子(北九州市立総合療育センター-西部分所)
2. 静脈経路栄養管理のリスクマネジメント/田中芳明(久留米大)
3. 日常診療に潜むカルニチン欠乏症/大竹明(埼玉医科大学病院)
4. 在宅呼吸管理を主体として気管カニューレ管理、合併症について/小篠史郎(熊本大学病院)
5. 重症心身障害児(者)に対する気道クリアランス法/宮川哲夫(高知リハビリテーション専門職大)



神奈川病院への看護支援の報告

中4病棟 園田康子、挾間愛海、神崎真代

令和3年4月1日から9月31日まで2ヶ月ずつ3人で交代しながら結核病棟の派遣看護師として神奈川病院で勤務しました。神奈川病院は令和3年度4月から結核病棟の病床数を30床に減らして新棟へ移動する予定で病棟スタッフ数を最小限に調整していました。しかしコロナ感染患者の急増により県内の結核患者がすべて集結したため人員不足になり、新棟移動予定の9月まで全国NHO病院から派遣看護師が集められました。

最初に病棟師長からの説明を受けた時、コロナ流行中に県外に出ることの恐怖や「私で役に立てるのか」という不安が頭をよぎりました。しかし「他院の結核治療を学ぶことができる良い機会だよ」と背中を押していただき、勇気がわきました。

神奈川病院に到着したときは自然の多さにとっても驚きました。病院は小高い山の上であり、宿舎からは富士山が見え、毎日野生の鹿を見ることができるほど自然豊かな環境でした。

患者数は30～40名で推移していました。全介助の患者は約16名、ADL自立患者が約12名、付き添い歩行や車椅子でのトイレ移動介助が必要な患者が約7名でした。病棟師長は不在で副看護部長と副看護師長2名が代行していました。看護師は12名、看護助手1名でそこに派遣看護師が9名加入しました。九州からは当院だけで、結核病棟経験のない看護師が多く私達は業務に早く慣れることができました。

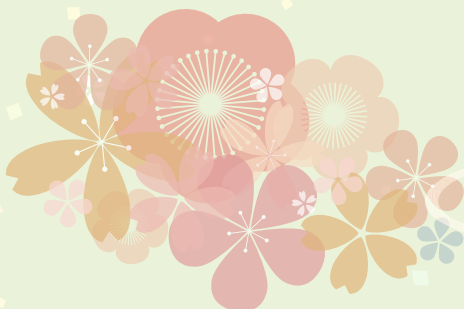
病棟スタッフは常に私たちを気にかけてくれ、質問にも丁寧に対応していただき働きやすい環境でした。派遣看護師同士で意見交流を行い自己の看護観を深めることができました。今回、他の病院での勤務を経験したことで当院がとても働きやすい病院であることを実感することができました。貴重な体験をさせていただき、ありがとうございました。



スタッフに囲まれた コロナ禍での あたたかい成人式

東5病棟 看護師長 福田綾子

今回、受け持ち看護師からの相談から始まった。「今年成人式で、お母さんがヘアメイクをして着付けしてあげたいと話しています。できたらいいですね。難しいですよね。」と母親の思いを叶えたいが、面会制限の中で病院の方針を理解した相談であった。第5波を過ぎコロナ感染者が減少傾向の時期であったが、面会制限は継続され再開の目途が経たない状況であった。母親へ「受け持ち看護師・病棟皆は成人式をしたい思いはあります。でも今は難しい。」と一度お断りをした。コロナ終息の目途は経たないものの、感染者減少・対面面会の再開はいずれ予測され、開催できる時期・方法がないか検討した。「withコロナ」の中で一生に一度しかない成人式、出生から入院までの経緯から成長を願う母親の気持ちを思うと、感染対策を行い開催できる方法を考えたいと気持ちが突き動かされた。母親へ感染者数が減少すると予測される11月に成人式をしたい事を伝え、中止もありうる承諾を得て準備した。その際に原動力となったのは、主治医の「とてもいいことですね。」と前向きに協力頂いたこと、病棟看護師の喜ぶ姿であった。しかし、感染対策を考慮した安全な開催は必須であり、母親へ当日朝に抗原検査の依頼、開催場所を大部屋でなく個室、時間の制限と、主治医との話し合いにて開催する事とした。当日は母親が実際に成人式で着た着物を身にまとい願いを叶え、美容師による着付け・ヘアメイクを行い成人となった姿を母親に見せる事ができた。式の際は主治医・リハビリスタッフも参加し、これからの更なる成長を願うスタッフ全員でのあたたかい成人式となった。本人の成長を願う時間でもあるが、母親へのこれまで育ててくれた感謝を伝える大切な時間でもあり、東5病棟としての家族ケアを提供できたのではないかと。今回、時期に恵まれ開催する事ができたが「withコロナ」とは言え開催はリスクを伴う。しかし、今だからこそ開催時期や安全な方法を検討し、患者様・ご家族様の思いに寄り添う看護を提供していきたいと思う。



福祉サービスは 三本の矢

療養指導室 主任保育士 神鳥悦子

昨年度も新型コロナウイルスにより、利用者様には、面会、外出、行事やグループ活動など、様々なことを我慢していただく状況が続きました。そのような中、病院として利用者様やご家族に何ができると、令和3年4月より発足された「生活支援検討チーム」と「日用品費検討チーム」が中心となり、多職種と協働して展開した3つのサービスを紹介します。

1 院内散歩の実施

県内の感染状況が落ち着いてきた10月～11月、病院敷地内の散歩を行いました。久しぶりの外の風や景色に「約2年ぶりに外の空気を味わいました。気持ちがいいです。」と言葉に出される方や、言葉はなくてもその表情から喜びを表されている方等、その様子に嬉しくなりました。また散歩の途中で、療育ホールの天井や壁いっぱい映し出された、星空や動物の映像を勧賞できるよう工夫も行いました。そのプロジェクターは今年度の日用品費で購入したものです。寝た姿勢のままでも楽に見ることができる影像に視線が釘付けでした。



2 クリスマス会の開催

各病棟で行ったクリスマス会は、感染対策を徹底しながら、医師、看護師、療養介助専門員、児童指導員や保育士が各々にサンタクロースやトナカイ等の衣装を着て、利用者様のもとに伺いました。またリハビリ部門にも依頼し、姿勢の工夫等で協力を得ました。そしてこの2年間、外出活動や行事等を自粛してきた分、今年は例年以上に豪華なプレゼントを届けることが出来、利用者様には大好評でした。



3 コロナ禍での家族支援

年に4回ではありますが、医師、受持ち看護師や療養指導室スタッフの3者が書いた手紙に近況の様子ができる写真を添えて、ご家族や第三者後見人へ送り、家族との交流を図りました。ご家族からは「写真を見て、元気になっている様子があり、楽しみにしています。」等の声が届きました。

いずれも多職種で取り組んだサービスで、医療・看護・福祉の3本の矢が整ってこそ、実現できるものと思っています。今年度は少しでも世の中が落ち着き、利用者様がほっとしてくださる、笑顔になってくださる、あたりまえの時間が戻ってくることを願っています。